

症例報告

研修歯科医から大学院生に立場が変わったことで生じた 態度に関する認識の変化

板家 朗¹⁾ 鬼塚 千絵¹⁾ 永松 浩¹⁾
喜多 慎太郎²⁾ 西野 宇信¹⁾ 木尾 哲朗¹⁾

抄録：九州歯科大学附属病院総合診療科にて歯科医師臨床研修修了後、総合診療学分野大学院に進学した3名を対象とし、研修歯科医（以下、研修医）から大学院生へ立場が変わったことで起きた態度に対する認識の変化を調査した。その結果、態度に関する認識は「見る」「見せる」「見える」という順序で変化することがわかった。この認識の変化はそれぞれの立場で生じ、立場が変化することで繰り返され、らせん状に発達すると考えることができた。態度に関する認識は異なる立場である教員や研修医と接することで刺激を受けたものと考えられる。

キーワード：プロフェッショナルリズム ロールモデル 態度 隠れたカリキュラム

緒言

プロフェッショナルリズム教育は知識レベルの教育に始まり、時期を追って態度や姿勢（心構え）、そして実際の行動レベルへと実践的・継続的に行うのが好ましいとされている¹⁾。またプロフェッショナルリズムのあり方を身をもって示してくれるようなロールモデルの存在や文化・環境に身をおくことも重要であると言われている¹⁻³⁾。さらにプロフェッショナルリズム教育を行う上でおこる隠れたカリキュラム問題の解決には、指導する側が学習者にとっての「良きロールモデル」となり、講義室以外でも、実際に行動で示す事が最も重要である。つまり、単に「知っている」ではなく「している」という姿を行動によって示す事が必要であると言われている⁴⁾。

本研究の目的は、時系列に沿って立場が変化した歯科医師の省察を調査し、異なる立場の相手と関わりあうなかで医療者としてのプロフェッショナルな態度への認識はどのように変化するのかを明らかにすることにある。

対象および方法

表1に概要を示す研修合宿に、一回目は研修医として参加し、二回目以降はスタッフとして企画・運営に関与した経験を持つ大学院生3名を対象とした。

平成26年7、8月に、対象者に研究目的を口頭及び書面にて説明し、書面にて同意を得た後に、筆頭著者

が半構造化インタビューを行った。質問は以下の三項目とした。

- ①研修医として参加した時に感じたこと
- ②スタッフとして参加した時に感じたこと
- ③研修医からスタッフになり感じた違い

得られた意見より態度・姿勢に関する気づきについてカテゴリーに分類した。その後、研修医・大学院生・教員の立場の違いについての概念図を作成した。

本研究は九州歯科大学研究倫理委員会の承認を受けた上で実施している（承認番号14-65）。

結果

インタビューより得られた意見の抜粋を表2に示す。得られた意見は現在の立場から研修医・大学院生として参加したことを振り返ったものである。

研修医として参加した時は、「時間を守る」といった社会人としての自覚を実感したという意見が得られた。「環境になじめた」、「仲良くなれた」等の合宿参加者としての受け身の感想や、「教員がどのような先生なのか知ることができてよかった」という教員（合宿実施者）のことを観察している意見が得られた。

スタッフとして参加した時には、「研修医のために」「裏方」といったスタッフとしての運営に関する意見が挙げられた。さらに合宿の準備・実施での教員の仕事ぶりや振る舞いを見て大学院生と教員の能力の差を感じたという意見があった。

研修医とスタッフの違いに関しては「見られる側

¹⁾九州歯科大学総合診療学分野（主任：木尾哲郎教授）

²⁾キタ忍歯科医院

¹⁾Division of Comprehensive Dentistry, School of Dentistry, Kyushu Dental University (Chief: Tetsuro Konoo) 2-6-1 Manazuru, Kokurakita-ku, Kitakyushu City, Fukuoka 803-8580, Japan.

²⁾Kita Shinobu Dental Clinic